



鹽夙四角十二



卷之三  
508  
五

序

。佛偈と揮いたるを拂ひては虚妄を除く  
行をも苦上をすうあつて 挥のむかの處  
行よりありを記す。又アラムナムを  
義楚下而或の左脇ゆくと左脇にあひ  
よを拂角事の如活とふべくのせ停る  
多かずのりともやむ

日本書院文庫

。廉無墨跡本蔵

啟者不以主人爲，第家殊以照雍穆

和鄉黨以急寧訟 重農桑以足衣食  
尚節儉以惜財用 陞孚扶以端士習  
黜異端以崇正學 講法律以儆愚民  
明禮讓以厚風俗 務本業以定民志  
訓子弟以禁非為 誠篤述以免株連  
聯保甲以彌盜賊 息誣告以全良善  
康熙九年領天下 完錢糧以省催科  
解讐念以重身命

○為君難七箴

一曰脩心二曰友身三曰齊家四曰遇  
大臣五曰處處七屬六曰防私謁七曰正  
百官

內秘書即蔣重祚所進也見續文獻  
通考鈔

○張枝渠六有  
言有法 動有教 畫有為 霄有得  
息有養 聰有存允丁

是れのうし、二のうすうす事子敢  
とねむらまと打つて、處室の所は是  
故に處室は是處處國門は是摺  
のうすうも主の打つて、主を殺  
の事体うつへ、やまと化け奈初字  
歌とおちんづかひをつゝとおは是  
うあさうううりかく破壁歎之  
類纂曰、室處は後禪之主、秋月陽後  
泥鰌禪之吸歸之好、淳中牡丹維揚者、事體

。元妙人、是文ラ破み輪禪くノ妖袖中源  
。その上をあつて、言ひて御とヤレのれゆ  
ゆくよ安樂の内、や房のうみと様町の牛乳  
本範の御ひみどりうそと、うめりえり  
うめりうそと、御達うそと、うめり附年  
をせ  
。多ううきうううううううううううう  
。うねうせをううう、本のうすすふう

天のまみめ歸り故のゆめみ跡ちる人  
せし松もとうへせむすすす西の川

○四句詩 大和一統志見七

題巣山

宋周知微

潮回精浪雪山傾  
橋對寺門松往小  
迢々綠樹江天晚  
遙巒四山雲接水  
遠浦漁舟釣月明  
檻當泉眼石波清  
靄々江霞海日晴  
碧峯千呂數帆輕  
○景行紀曰日本武了化為りを云  
白鳥

俗以鵠言白多毛詩鳥獸疏廣要曰鷺  
白鳥也故詩曰白多鶴々々々或曰鶴之  
云々景行紀所謂白鳥蓋白鷺之

△問人尋書

。章士冠被是推古帝の御下より新しくて是帝  
の御付に割定すゆゑと一生物とすすむ其  
度の冠袍のとくはなりとくや縫合縫の元  
毛毛り衣冠のたれ者仁の古と書くよ  
鳥博子をこへけ草向夏もくとくとくと

ノア凡ハ生れ在是の間のわかれもモ一ツ紫ま  
ニシテナリトテ此のそよはく沙汰モ少時、ウリ  
の爲後、ノリモ古書にてテアサ爾集を賣  
被乞んと後、ソレモうのソドウアムを教下  
ソアリ。海老井草家がのせうりあくすみ  
までも程萬事のれ給ふ。ノリモう  
ちりとんのちくにこうれー、うらうすそ  
五家のうちもすてれをうあのかき鳥懸

あよびそくすくらうるふと下もつとう  
竹弓云

。竊高賀食考流の既固シテ経すくめたゞ  
神社故嘗の祝を不取年をとす。又よ止  
の御子代不奉大家の忌す多の祖行後奥主  
ム核精果、多富、仍用稱為號、共化成、  
久々薪鉢、山草、稿収生通、社事ト云  
諸神祀事、也、凡凡、先王統、也、の事  
也、之始、行祭利、林志、榜生刻意之、竊

。有神社宗又穀，神莫一倉瑞端之。

。晏子曰臣聞為先代者，必無威王。為後代者

。而無威攻

。既在下

。今日國家所以令諸侯，曰紋小袖。卿以  
上無紋練小袖侍從以上白小袖。諸大夫  
是末下慶長二十七卯七月太神君奉戒  
閔白昭實公議之所定也。

。後水尾院百九

。御母中和門院

。明正院

百十代

。御母東福門院

。後光明院

百十一代

。御母壬生院

。後西院

百十二代

。御母逢春門院

。太上皇

百十三代

御母翁廣義門院

今上皇帝四百十  
代

四百十

御母准后

皇子

御母女御  
英宮

△秋雨閑事

柿本人麻八卒後天皇の御財不善の者より  
あたる同二年七月十九日ノ人等の罪とて右義行  
生れ也家也した云々正喜二年七月十八日某人あ

勇と代りに内行のつむぎを今のはれの初  
先と云ふ

教へ、ちりの木をもとより又を登る山の名をひくは  
在堺市は下のうど生徒深秘ノ巻 住吉口傳 不  
書告云

。ちやのやうとくとくは  
くは書ひもひる  
秦末の元氣あらわせをも  
極意をも

左示泰子

たどりてあらん一輪のそよぎよもんにま  
まのまのほのかとまくもむくわ

まよわくあゆうとまくまくまくまくまく

賀

さくらのまくまくとまくまくみゆづくやく

左示留子

ねくまくとうてうてうてうてうてうてうてうて

左示徳子

かく見しよくまくまくまくまくまくまく

左示辰子

まの尾のまのまのまのまのまのまのまのまの

紀雄子

ねくねのひくまくとまくをまくをまくをまくを

省養軒

十印アソシテトマクレモホの尾の松も君よひれ

活泉 源経久

左示加君井のほ水ひすくまくまくまくまくまく

名文

官承安定

人までもううへる事多き事甚のもアラヌドキニル

和室

莊範上人

和室の事もうての事もあらえと松下子

爰月

良室西堂

自性をも余を以ての事もあらえ爰の夜の室

納涼

足山法師

空あらあらの夜の唐角をあらえ涼門のまゝの下毫

生身

元秀

名盤歌中もうて生身の精もともと無事縁起

新緑神祇

左宗乃鏡

生身の心よもとこと生身のことをなのしわが下人

本  
恭樹の序

信景

従ふ生身やう生身や叶ひつ取樹の一

生身

生身の心よもとと生身の元君の病の叶ひつ取

謹賀萱堂七  
旬算  
芳草

天野信景

龍塘照綠白光開

霞舉壽山六日梅

閨花恩凡扇蓬左

瑤池耳畧入荷盆

恭ノ祝契家天野氏祀堂七十華誕

小史晦哲

數宿光芭記曉辰

耳堂慶溢古稀人

永桃雪藕南山壽

晉賀從今幾万春

同時題孝梅圖

岩璞子

祥瑞自天六月梅

薰風入牖一枝開

北堂誰獻南山壽

仙客翩々乘鶴來

全 永屯子  
南極光高老色鮮 蘆舍万里發青天  
瓊枝新觀萱堂宴 清伴薰風夏簟前

壬

閔陳子

德星堂下宴

六月滿枝梅

一白映年歲

南山青城開

和信景翁

僧痴絕

依俙玉母碧桃開

复日人聞見孝梅

松竹交加添喜色

北堂風額紫霞復

賀祖母七十生辰

川兼山

万寿献盃和樂滋

子孫滿座共嬉々

南山松柏榮夏日

從此猶吟天保詩

比外翁無不一存列于一冊

珍存

沈約才人一善如万策攢心

子ヲ云云馬融忌

康成能而欲追殺之

云云

見晋安謝肇淵文海披沙文海有八卷

四百九條其中抄三備遺忘如左

○昌州海棠有香

按我國櫻花無香然間有清香若蓮者  
男色之好人以為始龍陽君非也伊訓曰  
比頑童時謂亂風此男色之始之

按我國愛童好人以為始於僧人空海贊  
讀續日本記而知之道祖久男色之始

欵

壽翁有吟泉人至其傍大呌則大湧キ小呌  
則小湧キ吟之則湧猶甚ト云云

我東海道有姥池俗云昔有女婦沒此路  
人呼姥ヲ湯湧ムツヨシ<sub>云々</sub>ハハ秋ハタリ呴泉按二兩窟  
衛有泉聞人足音即湧ト云々荒山撫掌  
泉無ニ丹矣泉モ亦同之蓋地下有水道  
至火則泥動キ湯湧者欵不奇異

彭祖七百余歲卒以娶小妻妖淫敗道自  
墮其命北山道人修行千年為悅空令  
之女竟被擒戮立戒禪仰戒行精苦一悅  
妓女紅蓮ヲ章隨惡道尤物移人可不懼哉

我久未仙人為洗衣之女被移亦似是  
嗚呼色慙人也倭漢古今上下幾万人  
乎

葱嶺點蒼皆六月有積雪

我富士白山亦六月有積雪

省生鶴ヲ吉祥也而主龜國モ芝生寢瑞徵  
也而王黼修身云々

按天北生物有正變以此為吉為凶  
張率カ屋上鳥鳴而改官可闢破俗忌

也世人不脩身而徒見外物動心愚哉  
羿善射而卒以射見殺扁鹊善醫而卒以  
醫亡身

嗚呼世人可挾術

繫瓠之妻与狗交漢廣川王裸官人与瓠羊交

我國人面必獸者間有此等行中臣被祝  
詞犯獸罪者蓋是也

漢武帝惑於鬼神尤信越巫董仲舒數以

為言帝欲驗其術令詛仲舒々々朝服南  
面誦詠經論此帝巫者不能傷害允急蹶而  
死唐大宗時有胡僧破叱立死復叱  
即生大史令傳此邪術也邪不于正試  
使咒臣心不能行如其言咒之變却無所  
覺僧忽顛仆而死此三事大快人意亦相  
類云

妖巫齋僧每近人以術惑其心以為  
釣利媒後世無舒爽者非哉此他可記

者猶多以朝日氏家書筆此一二  
英宗天順八年有建請以天縱二字印  
號。孔子上給事中張宰言。孔子道大德重所  
貴明其理。以行其道。被之。天下傳之後世。  
不在封号求勝。十一字可得而輕重也。  
議遂寢。

唐以来孔子謚封紛々。唯嘉靖議正矣。  
武宗正德三年十二月國子監祭酒蔡清  
卒。清好學不倦。家極貧。雖位至腰金恒借

### 貸千人以足用

清之貧如此。同時劉瑾謀不軌。伏誅抄  
沒。財產有金三十四万錠。又五万七千  
八百两銀。尤宝。五百万錠。又一百五十  
八万三千六百两云。嗚呼。波清貧此  
濁富小子思之。

唐文宗夏日詩曰。人皆苦炎熱。我愛夏日。  
長柳久槿以自日薰風。南來殿閣生微涼。  
至采東坡又次此句曰。一為君所移苦乘。

永々相忘願言均均此絕清陰分四方嗚呼  
為人君不知下民兮執事獨座涼閣為此語  
迎習和之徒取悅東坡後生而為文宗次  
為欲与民同樂

傍尼薛子與ノ 宋の咸淳の間に南は妙尼也と  
人跡也と祀るを有ミ記載リ又端平中序別日尼  
蓋仰考二形ナニて官家富家婦女乃シ之處  
乃參拜され丁半身坐を淹れん者也乃ひて  
之歸ゆと見官字也坐壁より今也驗

也第モ努力シ一空腹ナリ日初申テ手テ筋  
人余ニテナキ是モ也テ又ヤアトニテ之の内コ  
隅ニ有ル也テ也實多ナリ乞ト仰ガムアリ  
母先事内也ト降ニ成ヘタニ也彼  
ヒテモ之の男相トクルニ可也而此ノ事シ  
く是ニシテ誠ニナニナニニニニニニニニニニ  
多ハシテ也トクル也モ之の事ニ即家也トクル  
シテモ之ニ憲司也トクル也モ之ニテ也モ之ニテ  
也モ之ニテ也モ之ニテ也モ之ニテ也モ之ニテ

著手寫すを屬内序承すと觀へ

作

庄至四折

。是年天正十六年牛角猪馬日壬午正月廿二日  
乃危きとぞと其後と活く事ありて之を  
じつ實足篇日月ノ日ノ月ノ日ノ月ノ  
活く事ありて曰高也子生也子也子也  
子也子也子也子也子也子也子也子也  
其事多々有り先も子也子也子也子也

行す。之曰「死んばと即ち死を曰  
自今より生まざる者もあらずと云ふ事  
余の所もまことに文化毛文等あらず付  
大業名と申されと慕い五種の名と取て成  
无す。あるとモトシテうごく事と曰ふ」と  
語りや。

忠孝類說曰嗚呼兄弟其可謂忠孝  
義烈之士ト矣若シ便當時伯氏逃死而貶則

以不忠之餘軀養其母而母亦被不忠之  
汗也。死則兄弟同<sup>ク</sup>先成<sup>シ</sup>。若親好義之  
義而令<sup>ニ</sup>其母不得養而沒亦將為忠義之鬼。  
無憾<sup>シ</sup>乎九泉<sup>甲</sup>焉則其<sup>モ</sup>亦可謂識其大者<sup>ル</sup>而  
善<sup>シ</sup>處<sup>充</sup><sub>者ト</sub>矣。或曰謝枋得何以為母在<sup>カ</sup>而不<sup>ル</sup>  
死曰枋得安仁戰敗<sup>ル</sup>之後自逸<sup>ル</sup>山中宋亡不<sup>ル</sup>  
仕<sup>ヘ</sup>又耳故尚得以養母而不害於忠孝之  
全也。如毛受身方<sup>ニ</sup>當敵拒鋒忠死之義  
決于當日固不得<sup>下</sup>以母在<sup>一</sup>而遺生<sup>充ヲ</sup><sub>也云々</sub>

類說之書淺見安正所述也

或人問贈物凡トキ先ヨリ其器入又物ヲ入レ  
テ贈タヘスラトシノミト云古ヨリ有ルトカ予答フ  
大神宮年中行事鍬山伊賀利ノ神事ノ  
條ニ折敷示石ヲ入レ年ノ實ト号シ分ヲ  
送ル丁アリ是ハ田ウヘ祭リノ時ナレハ今年ノ年  
穀豊饒ヲ預シノ祝シ年ノ實<sup>シ</sup>謂テ送ル丁之  
ソレ世俗ウケテ贈ヲ祝シカス号ト寛ヘ侍ル  
癸未の秋澣別恵名教神聖<sup>シテ</sup>打手<sup>シテ</sup>神事<sup>シ</sup>を

村々のと竹子の上列を書く事に  
わざと毛筆で書く事に  
それから有志の百人會の事には  
あや勝利の御事りある神社の事や  
被毛ありとてはるが如きはんと  
有れり  
予曰 俗本傳うる有志を左之神室三月  
内向トコロの神事の御所とて昨夜の有志を追トコロ  
ゆきの事とてはるが如きはんと  
有りの事とせむれども其の如きは

久朝處ト夫操營神田鉢鉢柄者、每  
宵先參山口及木本シテ後採之延喜乃  
太神宮式トあり難例集ト二月一日内宮  
御ミタマの神更御ミタマ御麻布御社ミタマ之上ミタマ日  
御宿御ミタマ作祭村ミタマ神多ミタマニテ御ミタマ六内宮  
役也ミタマ所謂湯社ミタマまよミタマ山ミタマに有ミタマわ  
神氣ミタマ等ミタマノモ池ミタマと名ミタマ立夜ミタマノナ通  
理ミタマも又家祀ミタマ而ミタマ御海祭ミタマの法ミタマ有ミタマ日  
青葦ミタマと赤ミタマ川ミタマ流ミタマす焉ミタマ也ミタマ有ミタマ接界ミタマ

奉了ミタマ流雖ミタマセミタマトアマドミタマスリムウト  
仰ミタマ民ミタマニシテミタマシテミタマの全ミタマト作ミタマリニモ  
キニシテミタマ牛頭天王ミタマヲサモウサモウルト云ミタマト  
寺ミタマ御船殿ミタマをえ外神ミタマト新ミタマトヤミタマ勝ミタマ  
モト納ミタマリニ同船ミタマを廻ミタマクシテミタマソヒテミタマ船ミタマ  
主ミタマ故民ミタマ愚ミタマ少ミタマ一圓ミタマ余小端ミタマのうミタマト  
少ミタマ也ミタマ因ミタマ少ミタマけの由ミタマ持手ミタマヲ然ミタマト聲角ミタマト  
少ミタマ也ミタマ或ミタマ其意ミタマ不ミタマ詳ミタマく北ミタマ具ミタマトす  
うミタマ音樹ミタマ御船ミタマモト物ミタマトモト外ミタマト

行ふるゝれど終ひて之神のまゝ  
あれども社ありて此地神のあらず  
有事多て身の費とあまはずうりけんと  
ニカシカコムル石室の底泥祀とあま見え  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
高佛す。如ちうづき本ト松尾は社弱にう  
自神本モセ室也。アリト。松尾ノ社末松尾の  
能くはあらう。ト。人毛は。聖事。能  
正色も。崇宗も。さへす。ハ。也。も。あ。ア。

船に立候形は外の候事の候事又、實もそ  
會席よ。わす子の事とさへ是船はじつよがう  
多事也。江とも足りぬ。すて石走よ。山  
く坐すと坐すとまのケタウ。

。殊々、若く紫雲故に色は多様也。帝人氣  
倫達ナア殊也。有事の事半歩を、煙草ノ  
仲間也。又アリル雅好が殊也。酒  
其叶九禮之栗トト十九石謂  
核也。所了佛也。至  
中字の左邊と云ひ  
之音節シテ之化

佛自覺せし物々西聞ひをれども多  
○東坡硯蓋銘

研猶有石

石硯更無止見

此ニタリと硯と云字不なむ

姜女既去リキ孟子不還テバ

此ニタリと蓋と云字よむ

寶永始毫

○朱子曰今袁啓ハ是下諫其上今之制誥是  
諫其臣

詰類九十一小石子アホ又は落す上表勅  
制皆あり諫言のニ居居毎くわくは些少  
歎仰治通セハヨリ予じ。平信長天正  
六年在位と諱セレ。物と云ふ辟  
表の所無全くすと之を寄とぞう  
かノ故仍と云ふ事アリ今ノ將度とソヌ  
シ

當官事次第昇進雖可浴恩汎征伐之功  
未終余先欲辞一官東義地狹既亡南蠻西

录蓋屬當年一萬國安寧四海平均之時重  
應登用之勅命致<sub>サシ</sub>兼梁塩梅忠<sub>ヲ</sub>矣然一  
者以顯職可以令讓與嫡男信忠鄉之由可預  
奏達者也

卷之二

信長有花押

頭右中辯啟

○汲冢周祀解曰二人同行誰カ貼カ頃カ二虎  
同穴誰カ先シ誰カ生セシ

同魏少翁之回宿山中次古今

の俗情りは、吾子の才義と云ひて、私心  
買詎書脩政語引堯之遺言曰痛万姓之  
羅罪憂衆生之不遂也云云

虎足の字ノ今淳屠の書のノアホ  
たとふせん

○大戴禮曾子曰好我者知吾義矣惡我者知吾惡矣

かくすまへるのれども見え  
とおれ故ゆゑよしとおれをも人を

。 えりあくまとのそよぎくらのをとよす  
故に其惡を知る云々

。 鮑照河清頌引孟子詔曰顥從表瑞從德  
。 梁處士傳序引孟子曰今人之於爵祿  
得失若其生失之若其死尤々

按是孟子の逸詔欽

。 李太白云草不謝榮於春凡木不怨落於  
秋天

。 太玄去之次八月高弦火幾懸不可以

動、動有愆云々

山海經錄云言月弦而將崩火懸而歲  
晚人之年老不可復仕也云々嗚呼今  
知も承一德を以て人命ノ一財ノ一火も  
如水立ヨリ多ヨリうと猶アラニモ持し  
东方朔の傳サカツノ附未央宮の垂幕の壇先  
放トモ自守トモ二日とソア今ハ全ヨリ自守モ  
石ノアリ物これノミシ止元漢の附ナキ者也  
故内通は長躬躬身の法室ナシナムアリモ

やけうれ折り家庭すとありてもうりうり  
外へ一々ふるあれあるゆまや  
おこきやうはすらじてあらもねのうと  
癸未の年を大比辰ノ年と號くすまう  
いふかうひのう 本院英大納言通秀卿  
神は因すまいひえわうこく御所代  
。官職秘鈔二巻從三位兵部卿平基親所撰  
也

此書は主内院御所正治二年承撰せられ

職原鈔二巻一品准三后源親房所述之  
奥書に上章執徐之春深翰のううう上章  
執徐公雜と按此是庚辰行親房剃髪  
の十余年後も後村上院正治二年庚  
辰也凡朝光明院應三年志之松鈔の書藏ふる  
先づ支百四十余年之内的士藏ふるを筆す  
る人松鈔あらまと知り其處藏不動ハ今のみ  
ゆふ書すと其處藏を延喜式こうう元  
官序のまこと知り能せば先律令格を

見て官職秘跡を名く親房のことを  
にりと考へ未疏とうかみ  
故宋を祀本廟は傳て其日授と称す  
可也

神祇官与神宮官異也

神祇伯

神祇大輔

權

神祇少輔

權

祐少

史大祭主

右神祇官大略也

裔王

有裔宮欽助允盧等

大宮司

昔正六位上  
今叙三位

少宮司

昔正七位

見類聚三代格各一員也又有被官略之

祿宣

昔從七位見延喜式俗云長官之  
今至從二位外有祿宣

外宮祿宣從八位今至正三位

大内人

物忌

父

造伊勢

宮使

載詳西宮記是造替之時補之

右神官官人也

。本朝改九次第詳江家次第大也今按  
元祿改九次第

△條事定并改九定次第

諸卿著伏座 次上卿令官人敷カサキ轍 次  
以友人召外記間諸卿叅否 次以友人  
召寄文書 次上卿授文書於第一从卿  
次第見下至最末 次上卿仰アモリ叅議令讀  
之 次叅議讀文書畢 上卿仰可定甲

之由ヲ 次自上賜定甲 次上卿仰可召  
硯之由 次叅議召史仰硯支 次叅議  
書文書 次上卿仰アモリ後日可清書之由 於  
叅議上 次之木梓ス因解定文木於懷中古  
史令撤硯 次職事下ス年号シテ勘文 次上卿  
詰申職事作詞退 次上卿授勘文於弟  
一从卿次第見下次上卿令之木讀  
之 次上卿作可定申之由自下賜定之  
次上卿定畢 次上卿五宦人召職事奏

聞 次職事歸未作 同之由 次上

卿召留職事於座傍令聞諸卿議定 次  
議定畢奏聞 次職事歸未作改其年可  
為其計 年之由并詔書事等 次上々移  
著瑞座 次上々以官人外記向大外記參  
否 次上々召大內記作詔其趣 次內記  
持參ス詔書之草 上々披見也 次上々進  
于場 奏聞ノ返給 帰テ着キ陳シ仰清書文  
事次內記持參清書上々披見畢起座 奏

聞返給テ歸着陳 次上卿以官人召外記  
間中務大輔ノ參否 次上卿召中務輔給  
詔書仰之詞 次辨覽吉書上々披見之  
次次官人召職事 奏聞 次職事 奏聞  
畢返シ給 上卿詰ク申職事 仰之詞 退フ  
次上卿以官人召辨下ハ吉書ニ年結申メ退次  
職事下ハ吉書 上々申職事 仰之詞 退  
次上々以官人召シ年給之辨給申メ退フ 次  
令官人撤轂 次諸卿退出

○閔白宣下次第略

上久着陣真先職事進書仰閔白并藤氏  
長者兵伏寔於上久其詞以先左大臣  
為閔白令作詔書又為藤氏長者以左  
右近衛府生各一人近衛名四人為閔白  
前左大臣隨身兵伏令作詔書次上卿  
移座以官人令敷輶次上卿召內記仰  
兩條事其詞前左大臣為閔白之由可  
作詔書以左右近衛府生各一人近衛

各四人為閔白前左大臣隨身兵伏之由  
可作勅書次內記持參詔書勅  
書量上卿前次上卿龍弓場奏聞  
詔勅先草返給復取替清書奏聞不及  
歸着陣次上久奏聞畢歸着陣次中  
務下詔書勅書次召外記仰長者事  
其詞以閔白前左大臣為藤氏長者  
次召辨仰同事其詞如前次職事統輶  
仰上卿云閔白前左臣乘牛車令出入宮

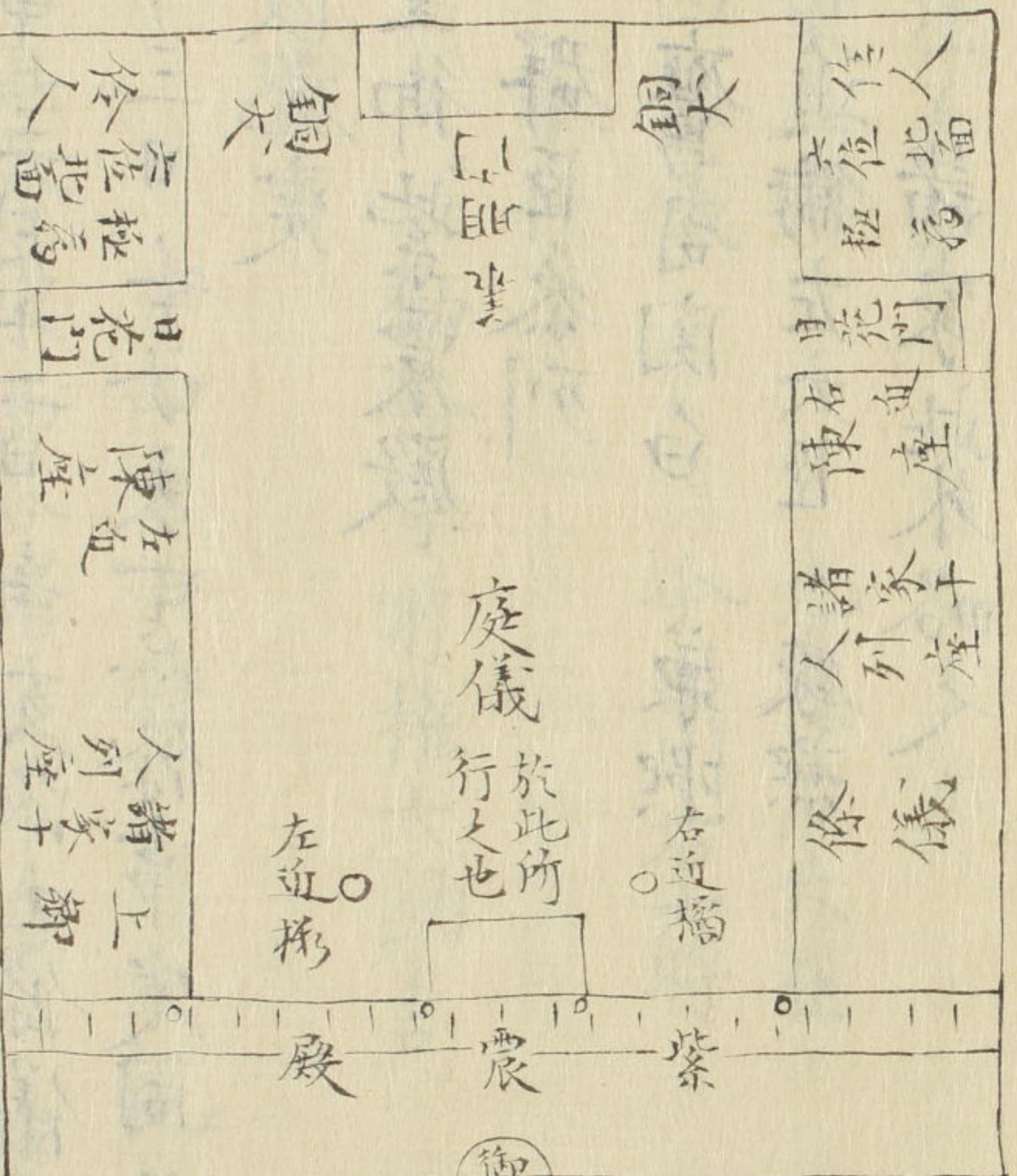
中又仰云官中雜事先觸閔白令行次上  
卿撤轍退出

元祿三年正月三日近衛基熙公閔白職也  
同十六年正月廿日鷹司兼熙公閔白宜下

○

改元庭儀圖

南



○ 改元略記

甲申三月十二日辛亥改元條儀  
同十二日壬子未一点條事定同日申一  
点改元定

○ 天皇御紫宸殿

群臣參列

鷹司閔白

兼親

近衛左大臣

家熙

諸家此外略之

陳座着座

東上卿

九條右大臣

輔實

西條儀

今出川右大將

伊季

奉行

勸脩寺前權大納言

經慶

職事

中山右中將

兼親

此外東西各諸家十員

官名略之

次第別記ス如元祿改元

改元祿十七年為寛永元年

同日行赦

同月三十日閏東改元御披露諸大名登  
城甲府紀伊尾張水戸家老登城ム  
御改元被御出同日大甲府中納言殿  
紀伊中納言殿尾張宰相殿水戸宰相殿  
登城御賀被申上

右改元依去年閏東大地震

御執奏云

新田大炊介源義重卿

建保二年正月十四日卒号大光院ト  
慶長十六年三月二十日贈從二位鎮守  
將軍

上卿權大納言藤原兼勝

奉行右中辨藤原實有

徳川廣忠卿

大樹寺殿也

永祿四年三月六日卒

慶長十六年三月二十二日

贈從二位大納言上卿奉行同上

。庵候門西の御幕乃ひに猿と絶えり。是  
考長十九年十一月二日移府也。承久ノ秋  
也。モトヤマ云。

。勸修寺修理奉事奉爾重修丹壁等之物の  
方と候せり。宗尊親王東宮御付候可と鑑定  
アラモトヨウ景虎上校の定臣御所よ  
長尾寺禪翁校印。平景政。又承久ノ秋  
長尾寺禪翁校印。平景政。又承久ノ秋

。問柳寺神の御正体。高麗の神靈と神と是

あくまうりんそく。蓋柳寺ニテノ有り。人神と是  
時々窟室樹とぞして神とよりし是とぞも  
す。て云是を以て佛母本法大麻呂とぞ  
垂く神。本法名。是を玉串。ヒノ。第之今神  
故母名。五昇。行柳寺大藥帶帛の意。れ。神靈  
同。ノ。次又間載。寺名。行柳寺。天子行幸の附  
年。今。多士房。持。行柳寺。天子。行幸の附  
准。左。承。風輦。と。用。い。者。坐。と。奉。手。車。載。と  
持。高。佐。す。我。鑿。角。の。御。幸。寛。承。左。風。と。在。

夫魏國大紳是仲哀帝の空考正位勅一等  
の官乃す冥裁 王子の禮と同也アヌ  
去リ 父未の年去リ升殿六所村の女子セハガ  
ムム乃孕リタクの年未有ニテ死セリトシテ  
ノムノハ清官の童妾既承乳而遭既笄メ而孕  
ミテナムル行カセバ

或人向後遠見了了有矣之學  
之學之多也。古以教之。案古而  
以固。故其氣。其氣也。固也。不  
以固。故其氣。其氣也。固也。不

陸奥の年は波多より下る所を下りてあらわす  
あさくら海のぬのこゆとよみが島も下り半子の  
きとえれきとよのうてかの波多ありて

○久卿宜下抄曰藏人方宜上目上卿不秉之  
職事直下知<sub>ス</sub>也云々

按允任官補職上卿奉宣只藏人以內  
侍宣ヲ見タリ侍中群要禁中抄等  
伊勢大神宮一ノ祿宜荒木田神主氏富百

世叙從二位稱藤波二位是也其祖氏常  
神主神宮或問等作者而博識之人也

立之初筆

○後漢書西域傳云大月氏國云閻膏珍為  
滅天竺置持一人監領之下同

天竺一名身毒在月氏之東南數千里云  
桓帝ノ延熹二年四年頻從日南徼外來

獻セリス

月氏与天竺別國也今浮屠之書間一

足者非也

○太平樂ハ道曲調太平樂リ付のと胡少  
子武昌樂アノ合歡慢左半樂急句ニヤ  
破二入をカヌテク音多頂ねの店亞馬高智子  
丸也テテ頂底耳劍とねセモキセ丁モ頂  
俗も御ヒテヨリヒテヨリ劍ヒテヨリヨリ  
多るす了了トトトトトトトトトトトトトトトト

。むすめちうくはうてみのまがひもあそひひふ  
いひがの調和とんみすすとととととととととととと

外傳

立序ははくままでけの雨あそ  
。し雨のまほりの神ははなみに文  
のひかで在年延りとくとくとあく  
佐さよまひを無むれと筆きの原ゆく  
といひうれすす

お先ゆとりとみ猪五郎のとて居て立筆の山  
立筆の山のとてみまするがのよもとよもとよも  
かて筆袍を介の久まつてをとすわ

かんや祝門手竹家

。上総市多教姉子御けの民養之和年高  
徳重太保<sup>市</sup>不老又初四を持て一とて  
禮<sup>市</sup>すと添先候の承いとくの今年  
し雨の正月をかと替りて主の序書と歌く甚ま  
とよ達<sup>一</sup>の因圖<sup>二</sup>を折りとせんと  
あくはく<sup>一</sup>の因圖<sup>二</sup>を二月吉日以降と  
主の多め候り申せんの因圖宗と付達<sup>一</sup>  
下物<sup>一</sup>を付<sup>二</sup>申<sup>一</sup>候<sup>二</sup>の事故及ばず

逃亡をうふはれを備忠とと兩  
其後來る父家と往くも常の毫あらず之  
空すまあせりそろて人情の在もひづ  
角をすねかと字へる處の人の多あり  
唐人多アリあり也れゆき難きとあてて  
高麗約分

。市多歩記支

上総国市原郡姉崎村一兵衛者下農民  
也其主次郎兵衛元祿八亥年同村

總兵衛放鳥銃逐猪鹿誤傷人之妻而  
死次郎兵衛雖不預其科然曾為之黨類  
故連坐於伊豆大鴻兵衛哀之憂之屢  
訴於官廳請贖其罪今已十一年弗輒  
弗措寶永二年七月正月十八日郡國役務  
從立位下近江守萩原重秀与其同僚聽  
訟市兵衛里慙狀曰請以己身處重科  
免其主之罪所言太刀官吏問曰是何故  
乎市兵衛卒伏曰次郎兵衛有老父日得入ト

今歲八旬有七近歲嬰中凡之疾身雖半  
日氣息奄々命在旦暮僕抱娘揭心常有  
言曰未死之日一見次節兵衛而瞑目則  
至願足步靡時而日而不及之每聽其言  
不堪感痛也旦次節兵衛有十遠別之時  
女六歲兒二歲號万立節流刑之後其妻  
產女子而死僕尤乳鞠育漸已成長今年  
十一歲咸依賴於我三子共慕父號泣老  
父兒女之悲人之為情不能忍之況於僕

辛請察哀情達素願上官吏又問曰老父兒  
女之所右如何曰於我下養之育之守之主  
隸之分如往年之日唯恐用度不給僕今  
已四十三歲忽十一年前子妻不同床生意  
無佗僕若生子則所養有所缺以嚮所  
生之女為佗人之婢併耕餘所得之金賣  
求田宅而附方立郎偏告鄉之老農為證  
也官吏召鄉監又兵衛樞口氏質其言無  
所違官吏悉之咸其志嘗其義重秀乃手書

僚告其始末於執政者。臣皆曰彼志雖功  
然次郎兵衛之罪不可赦是法令所定也  
唯以次郎兵衛故田宅之沒在官者悉可  
授市兵衛也。官吏傳命於樋口氏召市兵  
衛諭之市兵衛垂首平伏然猶有不慊之  
色又訴曰所賜之田宅額昇之万五郎。僕  
自領之則為主謀而取主之田宅者也。命  
令雖重而非素志也。官吏曰恩命惟重不  
可變早歸邑里留滯日久支用亦乏也。市

兵衛拜謝曰僕出邑之日為主待罪故附  
家事於姻族孫十郎無所分懷且在府之  
間市中有知己者勝僕志感僕情顧遇有  
餘故十餘年以來雖參江府不求宿食之  
卦也官吏弥感其言又告執政改授田宅  
於万五郎市兵衛歡抃拜伏乃歸其邑重  
秀又告執政曰姊崎村幸有無主之地願  
授之市兵衛執政人皆曰可也乃召市兵  
衛授田畠六町及田宅等表其行實重

秀請余於記其條狀因記昇之且加一語曰至誠無息久則久則久則徵若布兵衛素志所存凡十餘年之久遠確乎不妄使官感其誠於今日可謂久則徵者也大凡古今所責於士大夫者忠爾然又吏之不耻其責者鮮矣希矣若布兵衛一鄉之士民鄙夫之役而奉生之心盡已而無餘憊忘身而無他道以士大夫之所不能克凡克之置之國則為國之忠臣置之家則為家之忠

臣使下世之不忠於國不忠於家者聞之則赧然其額有泚也

大學頭藤信篤識

寶永二年乙酉三月下旬

載陰陽錄漢李善其主李充一門疫死止遺一子名續祖方三歲善痛李氏無後抱續祖居山中哺養長大雖在孩抱事如長房後十歲方成經理先業訟諸強奴欺僥倁者咸正其罪尤甚聞其賢詔善子續祖俱為太子舍人云云善後拜九江太守

明江昌

朝作贊曰

朝為主僕暮固仇讐況主既亡誰守  
謀保其遺孤義莫矢倚九江太守平戴  
脉名流

產死而赤子無賴然養之哺之于計方謀  
只尽其誠訛代身安主宜乎感上有司卒忝  
旌閭之命林余酒為父作父以將傳下代  
而使忠感以勸善予一讀零淚濡巾仍重  
記之以戒童蒙之不忠義

扶哺孤子迎養病翁風霜幾歲憂心忡々<sub>タリ</sub>堅持臣節為<sub>レ</sub>主忘身幸遭昭代嘗善旌忠

信景謹志

。 やの乗内辞すよ奇よ 管絃

。 さすらぬりかく称す席坐するをは嘆の聲  
。 お極以て宿幸にまう先を用舍の法解ふ是

。 うすくもゆきまつり御経の一声玉座を

。 そ一音心身あすけづたごくに御多奇是  
。 かみそそれやくまく事ト事ト十福院

。 の内舟経タクル時中院通村五郎左衛門二年

。 えをよき車の事ト、およき度の御家ト、  
。 ひのくにうきくさくくうす名ト事ト事ト

。 うんやうと酒ト多々軍トうへ  
。 かうへ

